

## 『遺産』の文言を吟味する

(下)

佐々木 徹

Sasaki Toru

このようなテキスト中の反復に気をつけながら読んでいくと、この小説はとても面白いのだが、読めば読むほどに、よく出来ているという点も見つかれば、まずい点も目についてくる。特に結末近くになると、いろいろ事件を盛り込み、その上でちゃんと物語を終わらせないといけないのでディケンズが慌てたのか、不自然な箇所が目立つ。一番ひどいのは、ピップがマグウィッチの国外逃亡に関してお咎めがないこと。<sup>1</sup> 本来なら、逃亡幫助罪か何かに問われるはずだし、ハーバートやスタートップも同罪だろう。こういう刑法上の問題のほかにも、このクライマックスのテムズ下りには妙なところがある。第 54 章で、ピップがマグウィッチを迎えに行きボートに乗せると、彼は“**Dear boy! . . . Faithful dear boy, well done. Thankye, thankye!**”としか言わない。しかし、この二日前、ピップはミス・ハヴィシヤムを助けようとして手に大やけどを負った身である。どうして、マグウィッチは「おお、ピップ

や、おまえ、その手はどうした！」とか言わないのだろうか？あるいは、なぜ彼はこのボートにスタートップというまったく見知らぬ人間が乗っていることに何の反応も示さないのだろうか？スタートップを見た瞬間に、さっと胸のポケットから例の聖書を取り出して、「今からやることについて誰にも言いません、もししやべったら神さまどうぞ私を地獄に落として下さい、と誓え」とか言い出してもおかしくないのだが。それとも、マグウィッチはこの時点では完全にピップを信頼しているので、見知らぬ男が同じボートに乗っていてもまったく気にしないのかもしれない。あるいは、前の晩にハーバートがすべてマグウィッチに説明しておいた、という可能性もある。仮にそうだとすると、マグウィッチがピップの火傷にいたわりの言葉一つかけないのはやはり不思議だ。どうやらディケンズにとって、ピップの火傷は重要なディテールではないらしい。ピップが手を負傷したため、ボートを漕ぐことができない、ではマグウィッチの国外逃亡計画はどうなるのか！——というようなサスペンスを盛り上げる気配は全然ない。「大変だ、どうしよう？ まあいい、スタートップがいるから」で終わりなのだ。第 56 章の末尾で、マグウィッチは死ぬ前にピップの手をとってキスするのだが、もちろん、この時には「やけど」の「や」の字もなく、マグウィッチが包帯の上からキスしたという形跡はまったくない。

いや、実は、この小説のテキストはピップの火傷より重い傷を負っている。この傷は第 44 章にあるのだが、それを検討する前に、物語の展開の確認をしておく。

第 20 章 ピップ、村を出てロンドン着。

<sup>1</sup> この点については John Sutherland, *Can Jane Eyre Be Happy?* (Oxford: OUP, 1997) を参照。

第29章 サティス・ハウスにて約10年ぶりで、洗練された美女となったエステラと再会。

第33章 エステラ、ロンドンに出てくる。

第38章 サティス・ハウスにエステラを連れていく。ミス・ハヴィシャムとエステラの口論。「おまえは冷たい子だよ」「こんな人間にしたのはあなたです」

第39章 マグウィッチとの再会。ついに恩人の正体を知る。

第40章 ジャガーズに面会。事実を確認。

第44章 サティス・ハウスへ。「どうして今まで黙っていたのですか？」とミス・ハヴィシャムを詰問。

この流れを頭において、第44章のはじめから見ていこう。ここも引用が長くなるので、日本語に訳しておく。

ミス・ハヴィシャムとエステラは鏡台のある部屋にいた。蠟燭が壁に取りつけられた燭台の上で燃えていた。ミス・ハヴィシャムは暖炉のそばの長椅子に、エステラは彼女の足元にあるクッションの上に座っていた。エステラは編み物をし、ミス・ハヴィシャムはそれを眺めていた。私が部屋に入ると、二人は目を上げ、どちらも私の中に生じた変化を見て取った。二人の目くばせからそれがわかった。

「どういう風の吹き回しでやってきたんだい、ピップ？」ミス・ハヴィシャムは尋ねた。

彼女はじっと私を見つめていたが、いささか困惑しているようだった。エステラは一瞬編み物の手を止めて私を見た。

それからまた手を動かした。私が恩人の正体を知ったのを彼女が察していることが、その指の動きにはっきりと読み取れるような気がした——まるで彼女が手話のアルファベットを使って話してくれたかのように。

「エステラに話があったので昨日リッチモンドに行ったら、彼女は何かの風の吹き回しでこちらに来ていると聞きました。それで、後を追ってきたのです」

ミス・ハヴィシャムが私に座るよう、三、四回合図したので、鏡台のそばの椅子に腰掛けることにした。彼女がそこに座っているのを昔しばしば見たものだ。足元もまわりも残骸だらけで、その日の私にはぴったりの場所に思われた。

「ミス・ハヴィシャム、エステラに言いたいことは、後からあなたの目の前で彼女に言います——もう少ししてから。それを聞いて驚かれるとか、不快に思われるようなことはないはずです。あなたがどれだけ僕を不幸にしようと思ったにしても、今以上に僕を不幸にすることはできません」

ミス・ハヴィシャムはまだ私をじっと見つめていた。編み物を続けるエステラの指の動きから、彼女が私の言葉に耳を傾けているのがわかった。しかし、彼女は顔を上げなかった。

「僕の恩人が誰だかわかったのです。嬉しい発見ではありませんでした。これは僕の評判や地位や財産をはじめ、何にとっても、少しの足しにもならないでしょう。わけがあって、これ以上詳しいことは言えません。僕自身ではなく、他人の秘密に関わりますから」

しばらく口をつぐんで、エステラを見ながら、どう言葉を続ければよいのか考えていたら、ミス・ハヴィシャムは私の言葉を繰り返した。「おまえ自身の秘密ではなく、他人の秘密。それで？」

「あなたが初めて僕をここに呼んだ時——向こうにある村

に住んでいた時のことです(あそこから離れなければよかったと今では本当に悔やまれます)——僕は召使のように働いて、あなたの欲求か気まぐれを満足させて報酬を得ました。あれは別に僕でなくて、他の誰でも構わなかった。そうでしょう?」

「ええ、ピップ」ミス・ハヴィシヤムは何度もうなずきながら言った。「その通りよ」

「ジャガーズ氏は——」

「ジャガーズさんは」ミス・ハヴィシヤムは厳しい口調になって、私に最後まで言わせなかった。「あのことに何の関係もありませんし、何も知りません。あの人がわたしの弁護士であって、おまえの恩人の弁護士でもあるというのはまったくの偶然です。あの人はほかにもたくさんのお客様を持っていますから、そういうことは簡単に起こります。いずれにせよ、誰かが企んだというのでなく、たまたまそうなっただけなのよ」

さて、ここで注目すべき点は、冒頭、ピップがミス・ハヴィシヤムの部屋に入ると、いつもと雰囲気が違うと気づくというところである。なぜ雰囲気が違うかというところ、それはピップがついに恩人の正体を知ったことを、ミス・ハヴィシヤムとエステラが悟っているからだ。問題はここである。ピップが口を開く前に、彼女たちは彼がやってきた理由を知っている。しかし、どうして、そんなことがあり得るのか?

三つの可能性が考えられる。

(I) 「ジャガーズお節介」説。

(II) 「わたしたち、いつかこういう日が来ると思っていました」説。

(III) 「エステラ千里眼」説。

まず仮説(I)から検討しよう。これは、第44章でピップがサティス・ハウスにやってくる直前に、ジャガーズがピップの近況についてミス・ハヴィシヤムに話した、という仮説である。そもそもミス・ハヴィシヤムがピップを惑わせることができたのは、彼女がピップの財産贈与の条件の詳細を知っていたからであった——恩人の正体はわからない、ジャガーズ氏が後見人をつとめ、彼はピップという名を名乗らねばならない、等々。彼女はこれをジャガーズから聞いて知っていた、と第19章に書かれている。ちょっと想像力を働かせてみよう——ジャガーズがミス・ハヴィシヤムの家にやってくる。何かの話の拍子に彼女はピップという子供を屋敷に來させていると口にする。すると、ジャガーズが、「ほほう、奇遇ですな。実は、その子に莫大な財産を贈与したいという人がいるのです。私がおの手続きを任されたのですが、この条件がまた変わっておりまして、恩人の名前は明かされないまま、彼はピップという名を名乗り続ける、というのです。不思議な話じゃありませんか」と言う——しかし、ジャガーズは、どんな凶悪犯も頭が上がらないという敏腕弁護士で、彼が人に言質を与えない、慎重な人物であることはたびたび強調されている。その彼が、どうしてまた、自分の顧客に関する個人情報を出したりするのか? これは用心深いジャガーズという男のキャラクターに合わないし、職業倫理にもとる行為である(当時はそのような意識はなかったのでしょうか?)。物語のこの部分は弱い、と僕は思う。

ただ、弱かろうが何だろが、とにかく、物語の世界の中では、ピップがロンドンに出てくる前のある時点で、ジャガーズ

はミス・ハヴィシヤムに、ピップの財産獲得条件をしゃべってしまった。これは動かせない事実である。では、第44章に戻って、ここではどうなのか？ 再度、物語の時間関係を確認しよう。第39章でマグウィッチがロンドンにやってきて、その翌日、第40章でピップはジャガーズに会いに行く。ジャガーズはニュー・サウス・ウェールズにいる男がピップの恩人だと認める。その5日後、ハーバートがテンプルに戻って来る。翌日ピップはサティス・ハウスに行く(第44章)。理論的には、この5日間のうちにジャガーズがサティス・ハウスを訪れ、ピップの現状をミス・ハヴィシヤムにしゃべるということは可能である——「それはそうと、ミス・ハヴィシヤム、ピップはついに恩人の正体を知りましたよ。どうやって知ったかは、ちょっと、申し上げるわけにはまいりませんが。なにしろ、彼はずっとあなたが恩人だとばかり思い込んでいたので、とてもびっくりしておりました。というか、ショックを受けたみたいですね」等々。しかし、いくら理論的にあり得るとはいえ、そして、彼にはミス・ハヴィシヤムに極秘情報を漏らしたという前科があるにせよ、このような展開は考えられない。ピップに向かって、マグウィッチはニュー・サウス・ウェールズにいたしか認めない弁護士が、これほど潜在的に危険な情報を無関係な第三者に漏らしたりするとは思えない。ピップが恩人の正体に気づいたということを知っている人間は、当事者をのけると、ハーバートとウェミックとジャガーズの三人しかいない。オーリックとコンピオンも、リストに付け足すべきかもしれないが、しかし、そのうちの誰がいったいミス・ハヴィシヤムにわざわざそのことを告げるだろう？ 誰もそんなことはしない。となれば、この可能性は排除せねばなるまい。ミス・ハ

ィシヤムとエステラは、ジャガーズはもとより、誰かからピップの近況について情報を得たわけではない。

次に、仮説(II)を検討しよう。ミス・ハヴィシヤムとエステラの二人は、前からピップがいずれは自分の恩人の正体を知るだろう、と予想していた、という仮説である。つまり、二人はいつの日かピップが血相を変えて屋敷に乗り込んでくる時がくるだろう、その時こそ彼が真実を悟った時だ、という風にずっと考えているわけだ。それなら、この二人のご明察ぶりも納得できる。しかし、そういう状況があったとは考えにくい。

もちろん、ミス・ハヴィシヤムは自分がピップの恩人ではないとはじめから知っている。エステラはその点について彼女から聞いて知っていたことになる。すると、第29章においてロンドンでピップと会ったエステラが、ピップが手に入れた「幸運」について語ったり(“**You had no idea of your impending good fortune, in those times?**”), 第33章で「ポケット家の連中が何を言おうと、あなたとミス・ハヴィシヤムの関係は揺るがないわ。それに、あなたの幸運を彼らがやっかんで苛々するのは楽しいから、あなたに感謝します」などというのは、口先だけの大嘘で、ピップの思い込みを利用した、きわめて残酷な言葉である。エステラはそこまで冷たい女なのだろうか？ 個人的にはそう思いたくないが、しかし、百歩譲って、そうだと仮定しよう。そうすると、第44章におけるピップの反応は不可解である。どうして彼はエステラに向かって、「君もこのことは知っていたんだね、それなのに、ずっとミス・ハヴィシヤムとつるんで、僕をだましていたんだ！」とわめきちらさないのだろうか？ 彼の非難はミス・ハヴィシヤムにだけ向けられている。だから、エステラが前からミス・ハヴィシヤム同様ピッ

プの恩人の正体を知っていた、とは考えにくい。仮説(II)も放棄せざるを得ない。

では、仮説(III)はどうか？ 上の場合とは異なり、エステラはピップの恩人の正体を知らなかった、という設定である。彼女はピップが部屋に入って来たその様子を見てすべてを悟ってしまうのだ。ならば、エステラは千里眼の持ち主でなければならない。彼女はピップの外見だけから、今まで疑いもしなかったのに、これまでミス・ハヴィシヤムがピップの恩人になりすましていたこと、ならびに、ピップが真の恩人の登場によって動揺していることを見通してしまうのだ。到底あり得る話ではないが、それでも、仮にエステラはこの瞬間なぜか超能力に恵まれていた、としよう。それなら彼女は、なぜ、たとえば、「ピップ、あなたが今までだまされていたのはお気の毒ね、わたしもそんなこと知らなかったのよ」と言わないのか？（今までずっと知らずにいて、ピップがやってくる直前にミス・ハヴィシヤムに聞かされたとしても、これと同じ疑問が残る。）この問いに満足な答えは得られない。となると、仮説(III)も放棄せねばならない。

このように考えてくると、三つの仮説はいずれも成り立たなくなってしまう。では、いったい、われわれはどう考えればいいのか？ 実は、第四の可能性がある。それは〈ディケンズ支離滅裂〉説である。すなわち、ディケンズが深い考えもなしに、エステラとミス・ハヴィシヤムがピップの発見に気づいていると書いてしまい、結果として、それまでの物語の展開との間に矛盾をきたしてしまった、という可能性だ。

この可能性は大いにありそうだ。なぜかと言うと、行き当たりばったりの思いつきで書いてしまいました、というようない

い加減な箇所がほかにも見られるからだ。たとえば、マグウィッチが死んだあと、ピップは疲労がかさみ、寝込んでしまう。これをジョーが看病するわけだが、この経緯について、ジョーは“The news of your being ill were brought by letter . . . .”と説明する。しかし、いったい誰がこの手紙を書いたのか？ ピップが病気になったことを知り、かつジョーの住所を知っているという人間にのみそれは可能なことである。そんな人間がいるのか？ ちなみに、ハーバートはこの時すでにカイロに行っている。では、ジャガーズの仕業だろうか？ ピップが病気なので金を取り立てられず、困った借金取りがかつての彼の後見人であるジャガーズのところに押しかけ、事情を知った彼（もしくはウェミック）がジョーに手紙を書く。そうすれば筋は通るが、こんなことはどこにも書かれていない。この手紙の差出人はディケンズが解き明かすのを忘れた謎の一つである。<sup>2</sup>

謎はまだある。病にふせっているピップとジョーの会話において、ジョーはピップの恩人がミス・ハヴィシヤムではなかったと「聞いた」と言う(“**I heard,**” returned Joe, “as it were not Miss Havisham, old chap.”)。それどころか、その恩人が例のメッセンジャーをつかわしたということも「聞いた」と言う(“**I heard as it were a person what sent the person what giv’ you the bank-notes at the Jolly Bargemen.**”)。しかし、どうして、そんな細かい点まで彼が聞き及ぶということがあり得るのか？ これもまったく不可思議というか、不自然なディテ

<sup>2</sup> ジョン・サザランドはジャガーズがこの手紙を書いたという興味深い論を展開している。John Sutherland, *Who Betrays Elizabeth Bennet?* (Oxford: OUP, 1999) を参照。

イルである。こうして見てみると、『大いなる遺産』の後半は穴だらけというか、理屈に合わないことがたくさんある。だから、第44章の出来事もそのうちのひとつではないかと思えるのだ。かくして〈ディケンズ支離滅裂〉説が頭をもたげてくる。

ところで、今見てきた一連の不自然なディテイルには共通する要素がある。それはいつの間にかみんながピップの身の上に起こったことを知っている、という点である。どういうわけかエステラはピップが恩人の正体を悟ったと知り、どういうわけかジョーはピップが病気になったことを知り、また彼の恩人についても聞き及んでいる。あるいは、第58章の冒頭を考えてみよう。病気から回復したピップが故郷に戻るところである。

**The tidings of my high fortunes having had a heavy fall had got down to my native place and its neighborhood before I got there. I found the Blue Boar in possession of the intelligence, and I found that it made a great change in the Boar's demeanour.**

ピップの逃亡幫助事件とその顛末がロンドンで新聞報道されて、それが地方版の記事にでもなったのか(!)、ピップが財産を失ったということはこの町にも伝わっており、そのせいで、ブルー・ボア亭の親父はピップにとっても冷淡になっている。ここでも、ピップの身の上に起こったことはみんなが知っている、という状況がある。してみると、第44章から後の不可思議なディテイルには妙な一貫性がある。ピップの身に起こる事件はなぜか他の人もそれを知ってしまう。これは単に、ディケンズが何も考えず、いい加減な書き方をしているからこうなっただけなのか？ あるいは、ディケンズが、こういう展開

にした方が話が早いと判断した、つまり、誰が何を知ったとかいちいち説明する手間を省いた、と考えるべきなのか？ それともこういう現象は、ピップなりディケンズなりの無意識の、一種のパラノイアめいたものを反映しているのだろうか？ 何か意味がありそうな気もするのだが、今はまだ明確な答えを出す用意は僕にはない。<sup>3</sup>

徹底的リアリズムの観点から眺めた『大いなる遺産』におけるこの種の失策というか、不可思議な謎は、少なくとも二つの大きな問題に関わってくる。一つはディケンズと推理小説の問題。ディケンズはウィルキー・コリンズの向こうを張って『エドウィン・ドルード』を書いた、あれが完成されていればコリンズもびっくりという推理小説が誕生していたはずだ、と言う人がいるが、それは違う。推理小説にあっては徹底的リアリズムの理屈が完璧に働かねばならない。『遺産』の段階でも、ディケンズはこの種の理屈に強くないことが明らかになった。<sup>4</sup> 『われらの共通の友』も同じで、穴がいっぱいある。それが急に化けるわけではない。だから、『エドウィン・ドルード』は完成されていたとしても、かなり深刻なミスがあっただろうと想

<sup>3</sup> もしかしたら、エレン・ターナンとの関係をいつ世間が知ってもおかしくない、あるいはすでに知っているのではないか、というディケンズ自身のパラノイアが投影されているのかもしれない。

<sup>4</sup> 拙論、“Dickens in Confusion?: Discrepancies in the Dénouement of *Martin Chuzzlewit*.” *The Dickensian* 94 (1998): 21–24 では比較的初期の『マーティン・チャズルウィット』におけるディケンズの失策について考察した。

像されるのだ。<sup>5</sup>

もう一つの大きな問題は、さきほど触れた、エステラという本作品におけるきわめて重要なキャラクターに関わるものである。この人物についてマイケル・スレイターは、次のように述べている。

**Dickens wishes to place Pip as lover in a situation of extreme, even fantastic, hopelessness, and does not want the reader's attention deflected to the character of Estella herself. She is simply a given entity in the novel, star-like, as her name suggests, in her coldness, beauty and remote indifference to the agony and strife of human hearts. Only as a child does she seem psychologically convincing . . . . But the adult Estella must, it seems to me, be considered more as a fictive device than as a character in the mode of psychological realism . . . . Dickens confuses us by not consistently presenting Estella as thus preternaturally passionless. At various points in the narrative he makes her suddenly display natural emotions . . . . (Slater, 280-81)**

この意見に対してはいくつか興味深い反論がなされている。比較的新しいところで、たとえば、ガーネットはこう言う。

**But rather than a defect in her characterization, emotional ambiguity is Estella's character as Dickens understands it . . . . She descends from a well-established line of Dickensian women of "cold" passion — Edith Dombey, Lady Dedlock,**

<sup>5</sup> 拙論、「推理小説の伝統とフォークナー」、『フォークナー』第13号(2011年)22-45頁を参照。

**Louisa Gradgrind . . . . (Garnett, 35-36)**

また、ダービィは以下のように述べる。

**Pip's persistent blindness throughout the story of his romance enables Dickens to complicate conventional paradigms of moral growth . . . . [W]hat Pip finds heartless is her insistence on her own point of view, a perspective that is chilled, sardonic, unable to love, but ready to be friends. (Darby, 215, 221)**

両方ともなかなか面白い意見だが、どちらにも弱点がある。ここで、ガーネットもダービィも、下線を施した箇所からわかるように、ディケンズがそのように意図したという含みでものを言っている。しかし、第44章を吟味することで明らかになったように、エステラに関するディケンズの意図はどう見ても一貫性を欠いている。結果として、マイケル・スレイターの意見がやはり正しい。しかしながら、ディケンズの一貫性の欠如はスレイターが想定している程度よりも甚だしいものである。彼が言うように、ディケンズはわれわれを混乱させるが、それは、ディケンズ自身が混乱して、物語世界の中で錯綜するロジックを整合しきれなかった、ということが根本にあるからだ。

要点を再確認しておく。エステラはピップ同様、ミス・ハヴァィンシャムが彼の恩人だと思っていた。そして、第44章でピップの顔を見た時、一瞬にしてすべてを悟る。おそらく、これがディケンズの意図したところであろう。しかし、彼はそれ以上深くこの問題を考えなかった。だから、「もし悟ってしまったのなら、どうしてこの時エステラは、ピップに、自分も今まで

勘違いをしていたのよと言ってやらないのか？」というような疑問が生じることに気がつかなかったのである。

物語のこの時点でエステラはピップに愛情を持っていない。しかし、ダービィが言うような友情というか、親しげな気持ち (ready to be friends) は少なくとも持っているともみなすなら、彼女が黙っているのはどう考えてもおかしい。仮に意図的に黙っているなら、彼女はここでピップの勘違いについて悟ったにもかかわらず、それについて何も言う必要はないと考える冷たい女だということになる。それはこれまでの彼女がピップに見せてきた態度、つまり、ポケット家の一族を悔しがらせるあなたには感謝してる、とか、あなたは他の男たちとは別の存在よ、とかいうような親しみを見せる態度と矛盾してしまう。

第44章の出だしは非常に不自然な場面である。ここにはエステラの性格づけに関わるディケンズの大きな誤算があったと言わざるを得ない。ところが、そういう指摘を行っている論文は見たことがない。すると、こちらとしては、もしかして自分の考えがおかしいのではないかと心配になる。しかし、どう頭をひねっても、ディケンズがやりそこなったとしか思えない。あるいは、「誰も気がつかない」ということは、「気がつかなくてもいい」ということなのか？ いや、そんなはずはない。

(本稿は2011年10月15日京都大学で行われたディケンズ・フェロウシップ日本支部総会での講演『「大いなる遺産」について』に基づく。)

#### 〈参考文献〉

- Dickens, Charles. *Les Grandes Espérances*. Trans. Sylvère Monod. Paris: Garnier, 1959.
- . *Great Expectations*. Ed. Edward Guiliano and Philip Collins. *The Annotated Dickens*, 2vols. London: Orbis, 1986.
- . *Great Expectations*. Ed. Margaret Cardwell. Oxford: OUP, 1994.
- . *Great Expectations*. Ed. Robin Gilmour. London: Dent, 1994.
- . *Great Expectations*. Ed. Charlotte Mitchell. London: Penguin, 1996
- . *Great Expectations*. Ed. Graham Law and Adrian J. Pinnington. Peterborough, Ontario: Broadview, 1998.
- . *Great Expectations*. Ed. Edgar Rosenberg. New York: Norton, 1999.
- Brooks, Peter. *Reading for the Plot*. New York: Knopf, 1984.
- Darby, Margaret Flanders. "Listening to Estella." *Dickens Quarterly* 16 (1999): 215–29.
- Fielding, K.J. "The Critical Autonomy of *Great Expectations*." *Review of English Literature* 2 (1961): 75–88.
- Garnett, Robert G. "The Good and the Unruly in *Great Expectations*." *Dickens Quarterly* 16 (1999): 24–41.
- Paroissien, David. *The Companion to Great Expectations*. The Banks, East Sussex: Helm Information, 2000.
- Slater, Michael. *Dickens and Women*. London: Dent, 1983.
- Welsh, Alexander. *Hamlet in His Modern Guises*. Princeton: Princeton UP, 2001.

(京都大学教授)